

学 位 論 文 要 旨

氏 名 西園 政史

題 目 「美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践学的研究
—デジタルカメラを媒介とした表現による教材開発を通して—」

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

今日、学校教育において言語に関する能力の育成が求められているが、美術科における言語活動とは一体どのような内容となるのかという問題を多元的な視点から考察する。先行研究の分析では、美術教育における言語の活用に関しては、鑑賞教育における言語利用や、制作時における作業を明確にするための言語利用が大半である。本論文は、美術教育のなかで主体的に言語を活用した表現の意味を明らかにすると共に、そうした活動が人間の本質的な部分で関わるものであることを、学校教育における写真を用いた教育実践を通して実証することを目的としている。

本論文は、第1部の基礎理論の研究と第2部の実践的検証から構成されている。

第1部・第1章では、美術教育における「言語活動」の基礎理論について考察している。第1節では、学習指導要領より言語活動が求められる経緯と、図画工作・美術における言語活動の目的を示した。第2節では、ソシュールと丸山の理論から言語構造を基に、美術教育におけるラングとランゲージュとの関係、また、美術教育における表層意識と深層意識などについて考察する。第2節では、美術教育における言語活動の特質について論じている。言語活動について論じた先行研究の分析により、美術教育における言語活動に対する認識を確認し、さらに、感覚器官と言語との関係を美術教育の視点で読み解き、体験的に言葉を捉えるために「擬態語」を活用することの可能性を論じている。第2章では、美術科教育における「質」に関する基礎理論について考察している。第1節では、デューイと茂木の「質」に関する理論を基に、本研究の主題となる「質感」に関する基礎理論について考察し、自然の中の性質でも数量等として捉えることのできない色や音等を第2性質と捉え「感覚的性質」または、「質感」と特定していることを導出している。第2節では、美術教育において「質感」を感受させる方法を提示した。美術教育において意識的に質感を表す擬態語を媒介させることで、質感の取捨選択が行われ、そこに発生する深層意識は言語とつながりを築き作品制作に反映されることを論じている。第3章では、美術教育における写真活用の意味を論じている。第1節では、美術教育における写真利用の変遷を先行研究から捉え、続いて、戦後中学校学習指導要領より「写真」の扱い方と特徴を論じ、中学校美術教科書により、教材としての「写真」の扱い方の特徴を考察する。第2節では、美術科教育における写真の位置づけを論じている。まず、美術の動向から全体を俯瞰し写真の存在について論じている。続いて、美術科教育における写真<デジタルカメラ>活用の意味とし、デジタルカメラを利用した撮影行為において発生する身体的特徴について論じ、このことで、撮影行為そのものに美術教育における教育的価値があることを見出している。さらに、美術作品の本質が危ぶまれる現代のデジタル化された情報化社会を概観し、美術教育への影響や映像メディアの概念の変化を示した上で、本研究のテーマとなる「質感の感受」は、大きく変化する時代の流れのなかにおいて、変わらぬ存在として位置し、継続する感覚として必要不可欠であることを論じている。

第2部は、美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する実践的検証と考察を行っている。第1章では、第1部の美術教育における言語活動を介して得られる質感に関する基礎理論の研究成果から、言語活動を介して得られる質感に関する授業の構築を行っている。第2章では、小学校における授業実践の分析と考察を行っている。デジタルカメラを用いた小学校における図画工作の授業実践研究として、小学生を対象にデジタルカメラを利用し、擬態語で捉えた表情を様々な質感で表現させることで、質感という新しい感覚を意識させる授業を行い、その実践分析を行った。第3章では、中学校における授業実践とその分析を行った。中学校における実践の一つ目は、言葉から発生するイメージとそのイメージに合う質感を感受し探究することで、作品に質が発生する場面の考察を行っている。中学校における実践の二つ目は、中学校美術科教育における言語活動について、授業実践を通して美術表現における言語の役割を分析し、美術における経験と言語との関係性を明らかにすることによって、美術科における言語活動のビジョンを提示している。

以上の考察を通して、美術科教育における言語活動の特質と役割について以下のような結論を得た。①言語活動としての擬態語は、我々の深層意識にアプローチし不明瞭な事物を美術作品として生成させることを可能にする。②造形活動において言語（擬態語）は、対象から得る感覚の言葉への置き換えを可能にし、具体性を持って認識することを可能にする。③言語（擬態語）は、グループ活動において、他者との共有を容易にし、会話を発生させることができる。④美術表現の工程において「言語」が一貫性を持ち存在することで、生徒にとって表現の目的を明確なものとするができる。